

やなせたかし著「アンパンマンの遺書」岩波現代文庫、岩波書店、2013年12月17日刊を読む

『あんぱんまん』

1. この絵本に登場したアンパンマンは、ぼろぼろのつぎはぎだらけのマントである。正義のためにたたかう人はたぶん貧しくて新しいマントは買えないと思ったからだが、今の子供達に受け入れられるとは思わなかった。奇妙な絵本としてすぐに忘れられると思った。
2. それでいい。所詮、ぼくは裏町の人。陽の当る場所に出ることはもうあきらめていた。ギラギラしたところはまったくなくなって、ぼくは気楽に仕事をしていた。
3. この最初の絵本で、ぼくが描きたかったのは、顔を喰べさせて、顔がなくなってしまったアンパンマンが空を飛ぶところだ。
4. 顔がないということは、無名ということ。ポオ氏と考え方はおなじである。
5. ぼくは、これは売れないなと思ったし、編集部でも評判が悪くて、
6. 「やなせさん、こんな本はこれ一冊にしてください。やなせさんの本質はやっぱり『やさしいライオン』のような絵本ですよ。あんな本をまた書いて下さい」と言われた。
7. 『あんぱんまん』は誰にも期待されないで出発した。本のあとがきにはこう書いてある。
 - (1) 子どもたちとおなじに、ぼくもスーパーマンや仮面ものが大好きなのですが、いつもふしぎにおもうのは、大格闘しても着ているものが破れないし汚れない、だれのためにたたかっているのか、よくわからないということです。
 - (2) ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そして、そのためにかならず自分も深く傷つくものです。そしてそういう捨身、献身の心なくしては正義は行なえませんし、また、私たちが現在、ほんとうに困っていることといえば物価高や、公害、餓えということで、正義の超人はそのためにこそ、たたかわねばならないのです。
 - (3) あんぱんまんは、やけこげだらけのボロボロの、こげ茶色のマントを着て、ひっそりと、はずかしそうに登場します。自分を食べさせることによって、餓える人を救います。それでも顔は、気楽そうに笑っているのです。
 - (4) さて、こんな、あんぱんまんを子どもたちは、好きになってくれるでしょうか。それとも、やはり、テレビの人気者のほうがいいですか。
8. 顔パスというのがある。この世界は顔で通用するところがある。政治家もそうだし、タレントもそう。自分の顔を売ってそれで生活する。顔売り商売である。プライバシーがないと騒ぐのはまちがっている。顔を売った以上はプライバシーは失なう。覚悟しなくてはいけない。

9. 普通の人は無名である。顔は知られていない。

10. 顔がなくなってしまったアンパンマンは、エネルギーを失って失速する。この部分が描きたかったのだ。

P195 ～ 198

[コメント]

日本人の正義感、やさしさ、みんなのことを思う心を育てたのはやなせたかし先生の「アンパンマン」なのではないかと、本書を読み再確認できた。アンパンマンのテーマソングを口にして育ったのは日本人だけではない。「アンパンマン」の心をもっと育てたい。

— 2014 年 1 月 30 日 林 明夫記 —